開催日：令和８年３月４日（水）
開催場所：釧路市生涯学習センター（まなぼっと）２階 多目的ホール

第 32 回 釧路湿原自然再生協議会
議事要旨

（１）収支報告

・特に意見なし

（２）全体討議、全体構想の見直し

（委員）

・協議会の姿勢や方向性について「主体的に」と書いてあるが、その理由としては、全国の他の再生事業では国有地、私有地によって主体がどこにあるかを喫していることがほとんどである。釧路湿原の場合は大部分が国有地であることから、主体的に土地の所有者である関係行政が行うということで理解していた。それで良いか。詳しく揉む必要があると思うが、この文言が適当なのか、違う表現のほうが良いのか。民間や様々な分野の参加も促進するという表現をどうするかについて次年度検討する必要があると思う。

（会長）

・南部での自然保護協会の取組などは河川の管理者ではないが、連携して取組を実施している。そういったこともあるのではないか。

（委員）

・当初は国主導という場所がたくさんあり、国有地というのが前提であったが、いまは周辺の山林などに活動が広がっていることを考えると、いろんな主体が関わるという方向で考えてみてはどうか。

（委員）

・高層湿原や低層湿原という表現は、ある学問の分野であり、地質の場合は高位泥炭地、低位泥炭地と呼ばれている。現在は一般にもわかりやすいように、湿原植生の特性を現したヨシ・スゲ湿原、ミズゴケ湿原などの表現に変わってきているためこのあたりも検討してはどうか。

（会長）

・国際的にも用語が異なっており、専門領域で難しいところはある。これまでよく使われてきた言葉とどう対応するのかも含めて、付録みたいなところに書いておいてもらえると良い。

（委員）

・行政機関、地域住民、市民団体、専門家という記載があり、要するに、ここに書かれている人が力を合わせて目標に向かって努力するということであるが、「専門家」とは何の専門家なのかがわからないので、「研究者」と表現してはどうか。

・最終目標に対してそれぞれの項目が今何をしてどこまできているのか、うまくいっていないので軌道修

正しなければならないのかなど、目に見えるようにしてほしい。最終目標に向かっての位置づけと、現在の状況を判断できるようなことを設定しそれをアピールすることが大事である。

（委員）
・どこまで進んだかわかるといいという意見は良く頂いており、ラムサール登録当時からの湿原面積の変化など、数字で出すことが可能なところもあるが、シマフクロウが棲めるような環境といった部分については、特に表現するのが難しい。

（委員）
・最初から完全なものを目指すのは難しいので、まずは表現する努力をしてみてほしい。

（委員）
・ネイチャーポジティブについて、この文言が突然出てきている。生物多様性条約のCOPの取組やG7から出てきたものと思われるが、その出所を書いていただきたい。

（委員）
・K-M GBFも突然文言が出てくるので、日本語で「昆明・モントリオール生物多様性枠組」と記載しておいたほうが良い。

（会長）
・全体構想ＷＧに出ていない人は分かりにくかったかもしれないが、そういう人にも伝わるように今後も努力したい。今日意見がなくても以降ある場合は、事務局にお寄せ頂ければＷＧのほうで検討したい。

（３）－１　生態系評価ワーキンググループの報告

（委員）
・貴重な情報を共有することで色々支援できると思うが、希少性の高い種の位置情報はリスクが伴うと思われる。情報公開に関して何か規制を設けるなどの対策は行うのか。

（委員）
・今のところはフルオープンを予定しているが、巣の情報などは公開せずメッシュにして広範囲で示すなど、情報の出し方を工夫していくことを予定している。今後、登録制にして、申請した方だけに情報を提供するということもできなくはないが、どのように対応するかはまだ整理できていない。現段階では、公開できる情報のみを提示している状況である。

（委員）
・過去に、木の情報が公開されたことでそれを食草としているチョウが乱獲された事例がある。移動できない植物など、現地の情報は守っていかなければならない部分もあると思うので、何らかの歯止めが必要ではないか。

（会長）

・時点ではポテンシャルマップのようにビジュアルだけを公開し、オリジナルは出していないが、詳細な場所を特定されないようにする必要がある。情報公開に関しては、逆のケースとして、動植物の情報を知らなかったために太陽光パネルが建設されるなどの懸念もある。

（委員）
・データをオープンにするのは良いことと思うが、アップデートの維持管理や更新をしていかないといけない。持続的にやっていくためにはどういう仕組みがあるのか。

（委員）
・太陽光パネルの問題で急いでいたこともあり、有志で作成したところである。データを提供してくれる側も助成金や自前の活動で出していただいていた部分もあり、今後、サーバー管理の予算が必要になるため、ワーキングとして持続的に進めていくための方法を考えていかなければならないと考えている。

（委員）
・是非、持続的に続けられるようにお願いしたい。

（３）－２　生態系再生小委員会の活動報告、トラストサルン釧路の取組報告

（会長）
・ヌマオロ地区のたまり形成については、なぜ突然このような案が出てきたのか。また、ハンノキ林については、何のための緩衝帯なのか説明してほしい。

（事務局）
・実施計画では単に直線河道を埋め戻すこととしていたが、生物多様性の観点からたまりにすることで魚類や水生昆虫などの生息場として機能するのではと考え、今年度の検討でたまりを形成する案を提案した。ハンノキ林については、主に農地と湿原の境界になることで栄養塩類の緩衝帯としての機能を想定している。

（会長）
・たまりだけでなく、河川と連続したワンドのようなものも作ってはどうか。

（会長）
・達古武地区のヒシ刈りについては、うまくいく見込みは立っているのか。

（事務局）
・一定規模でのヒシ刈りを行い、ヒシ以外の水生植物の生育環境の確保を考えている。これまで事業で実施してきた範囲と比べて小規模になる可能性はあるが、持続的・自主的に実施していきたいと考えている。

（会長）
・きちんとモニタリングしながら実施してほしい。

（委員）
・達古武について、昔は達古武の底質は砂だったと聞いていたが、いまは泥になっている。底質が変化したあたりから水草の変化が起きていると思うが、そのあたりはあまり議論されていないと思う。何か知見はあるのか。

（事務局）
・現在の底質は腐植質であることを確認しており、それの影響もあってヒシの分布が拡大していると考えている。砂質の状況については把握していない。状況をご存じの方がいれば提供いただきたい。

（委員）
・釧路湿原の総合調査をした際に、昔は達古武沼という名前であったが、湖ではどうかという議論があった。当時専門家より、湖底が砂質の場合は湖でよいという話があったが、当時から腐泥が溜まっており、沼という名称がよいという議論があった。達古武湖の北側では水深は変わっておらず、流入支川付近は砂質になっている。達古武湖に流入する砂質のコントロールなどを検討する必要があると考えている。

（委員）
・自然再生事業は2003年に環境省とトラストサルンの共同で始まったが、2006年に話し合いが決裂したため表から消えている。2006年に活動が終わったわけではなく、自然再生協議会の事業計画からは外れたが活動は継続しており、これは高く評価してほしい。

（会長）
・是非、今回の成果の中にトラストサルンの成果も入れた形で公表することを考えたい。

（委員）
・湿原再生の評価について、ヌマオロ地区では河川に湿地環境をつくるということであるが、目標となるような氾濫源のリファレンスを設定した上で群落レベルでの調査を行い、評価してほしい。
・幌呂地区の植生調査について、区画R2で近年減少してきているのは自然なことであり、栄養塩が豊富な環境生育している雑草的な種が減少していると思われる。これらの種についても湿生環境でよくみられる種としてカウントしているため評価ができないのではないか。

（委員）
・ヌマオロ地区の取組について、直線河道埋め戻し後にたまりを作るなど、茅沼地区をそのままマネするのではなく工夫している点がとても良いと感じた。

（委員）
・ハンノキとヨシ・スゲ群落を示した経年変化図について、ハンノキが近年減少傾向に転じていることが見えてきている。久著呂地区の検討で、2016年洪水とその後の3年間で土砂堆積や冠水の影響によりハンノキ林が減少したというような報告があった。こういう経年変化が気になっていたのでとてもありがたいデータである。湿原内で起こっていることと、土砂や水の流れを合わせて、事業実施の計画や評価を

検証する場合に、是非、土砂水循環小委員会との連携もお願いしたい。

（委員）
・湿原全体の植生の経年変化グラフについて、一般目線でもすごくわかりやすくて良い。達古武湖などの水質除去による変化なども、このようにもう少しわかりやすい形で示せると良い。
・植生変化の図に関して、協議会発足当初の目標は1980年だったので、その当時のデータも入れてほしい。

（委員）
・トラストサルンでも他事業のような科学的な調査をしたいと考えている。協議会で是非働きかけをしてほしい。

（会長）
・協議会から各人に働きかけるのは難しい。協議会にはいろんな研究者が携わっているので、トラストサルンとして個別に声掛けをしていただきたい。協力できるという方がいれば是非声をかけてほしい。

（委員）
・達古武湖について、空中写真からの変遷データは多くあるが、森林伐採などの状況についても把握するべきであると考える。

（４）みんなの湿原小委員会の活動報告

（委員）
・ホームページの内容を見ると、書いてあることが難しい。この小委員会では取組内容をもっと多くの人に知ってもらうという目的もあると思う。無関心の人にも興味を持ってもらえるような工夫が必要である。

（委員）
・その通りである。難しい言葉を使ったために、一般の人が避けているようなことがよく起こっている。どんな人でも受け入れられるような言葉を使うなど、試行錯誤をしていく必要があると感じている。

（委員）
・多くの人に協議会が何をやろうとしているのかを知ってもらうためには、学生の中に入っていく必要がある。中標津の学校ではタンチョウ学という授業を実施している。こういう協議会の場に参加しやすいように工夫していければいいと思う。

（委員）
・学校教育という点では少しずつ展開しており、湿原をテーマに高校生が研究するような展開ができている。また、大学との連携も進んでいる。

（委員）
・ワンダグリンダでは冊子を作っており、色々な場所でそれを見ることができていたが、近年はホームペ

ージでなければ見られず、あまり人の目に触れる機会がなくなっている。この点についても検討していただきたい。

（５）土砂・水循環小委員会の活動報告

・特に意見なし

（６）その他

（委員）

・釧路湿原自然再生協議会の国内での位置づけや動きについて共有してもらえると参考になる。

（会長）

・自然再生専門家会議というものがあり参加しているが、釧路湿原自然再生協議会のようにシステマティックにやっているところは少ないと感じる。いまのような事務局体制を維持しつつ、地域の人にも関わってもらえるような体制づくりが重要である。全国的にはボトムアップ型が多い印象であり、いかに市町村や国に協力してもらうかについて悩んでいるところが多い印象である。

（委員）

・今後、外国にも発信していくことを視野に入れて、ホームページも、協議会や小委員会の英語名を併記すると良いのではないか。英語名があれば、興味のある人は自分で翻訳してアクセスしてくれると思う。

（委員）

・ビデオによる事前説明のおかげで議論がしっかりできたと感じた。今後、小委員会にも還元して進めていければ良いと思う。

（委員）

・協議会の若返りが必要と感じる。スーパーサイエンスハイスクールのように、若い世代と取り込んでいくのが重要であると感じる。

（会長）

・動画がコンパクトにまとめられていて非常に良いと思った。できれば、アーカイブ化していただけると良い。

以　上